

---

## ショックから蘇る中国の政治改革

張 琢

〈愛知大学〉

歴史は繰り返される。

「治乱循環、王朝更迭、人存政挙、人亡政息」（治乱は循環し、王朝は入れ替わる。人が在れば政治が起こり、人が亡くなれば政治は止む）——中国の歴史でおこなわれてきた軌跡を体現していよう。

1949年中華人民共和国が建国され、中国大陸は統一された。元来の中国の現代化の発展は清王朝瓦解以来得がたかった平和安定の社会的環境を創り出し、共和国成立後の数年は確かに良好な局面を迎えた。1952年までの3年という短い期間で、中国大陸は長期にわたる戦乱で破壊された経済を回復し、GNPは史上最高レベルに達した。

しかし、好景気は長続きしなかった。続いて、毛沢東をリーダーとする執政者が「農民民粹主義」の道に沿いながら、断続的「革命」の方法によって、「左」から二千余年前の周秦時代に逆戻りしてしまった。「三大改造」（すなわち農業、工業および手工業の「社会主義」改造）、「人民公社」および「文化大革命」運動によって、経済方面では、農地占有と生産方式が西周の井田制にまで戻った（そのうち大きな土地は公有田とし、家の前後、田の隅にある小さい土地を自留地、すなわち私有田とした）。工業方面では、殷周以来の官営手工業の方法に戻り、商業方面では、完全に国家が独占する「禁権制」とした。また政治方面では、毛沢東は秦始皇帝、漢武帝、唐太宗、宋太祖およびチンギスハンを超えるという宿願を実現し、最高の絶対的権威をもつ地位を確立し、公然と「万歳」〔訳注：皇帝を指す〕を気取った。社会制御は空前のレベルに達した。また文化専制の暴挙は、始皇帝の焚書坑儒、清朝の文字の獄すら色を失わせるほどであった。毛沢東が死去するまでに、中国はほとんど彼のために何も無い太古の昔に戻されてしまったのである。

毛沢東が死去し「文革」が終幕したことは、中国伝統の農民運動の終結を示した。

毛沢東の死去後、鄧小平が再起し、中共執政後「二次革命」を開始し、混乱をはずめ正常に戻すべく、共和国を改革開放の新航程に向わせた。これらのことは中国現代化が再度始められたことを示していた。

中国史上、真に社会制度を根本から変革する作用を果たした改革は2度ある。

一つは紀元前356年に始められた商鞅変法である。1世紀あまりの紆余曲折した激しい争いによって、ついにそれまでの封建土地所有制を排除し、土地私有制の基礎の上で、皇帝中央集権が行政層レベルで統治する制度を確立し始めた。この政治体制が事実上毛沢東

統治の終結まで続いたのである。その間大小さまざまな農民反乱、政変、王朝の交代と具体的な制度上の調整や修正がおこなわれてきたが、個人の専制独裁という根本的な体制は変わらなかった。この二千余年続けられてきた専制体制のもと、世界最多の人口をもつ国家の人力、物力を合わせることで、中国の伝統文明を創造し、近代に至ってから西方の工商業文明の本当の挑戦を受けたのである。

もう一つが1978年に開始した改革である。この改革は、その質からも中国において産業革命を実現し、現代民主制度を確立するものといえる。その実際の起点と方法は、毛沢東執政時代に、内で継続してきた中国数千年の皇帝集権専制の大伝統、外でソ連より引き入れた「無産階級専制」の小伝統を加え強化された制度の積もり積もった弊害を除去し、歴史的経験と教訓をまとめ、先進国の成果と経験を吸収し、これを見習うことで、経済繁栄、政治民主化、人民の幸福に向う現代化発展の道を模索したのである。

1980年代中後期、中国学術界の中国の現代化と発展理論についての探求は、すでに毛沢東の1960年代初めに打ち出された「四つの現代化」（すなわち工業の現代化、農業の現代化、科学技術の現代化と国防の現代化である）の限界を打ち破り、全面的現代化の概念の内容は経済、社会、政治、文化を内包するシステム工学であり、全体社会の変遷過程であると考えた。当時中国共産党と政府の指導者は、その発展の戦略構想を練る中で、各方面が協調して発展することを強く望んでいた。

しかし、社会発展の主観・客観的要素・条件の差異によって、中国の現代化は1840年のアヘン戦争後の近代、あるいは改革開放以来のこの25年間の発展、空間地域・社会各階級階層間での利益の獲得、あるいは経済、社会、政治、文化各大要素の推進にかかわらず、すべて不均衡なものであり、非同期的なものである。主観的願望および目標の同期性と協調性は、事実上の非同期性と非協調性との発展を求め、中国の現代化の理論、および発展戦略と実践の対立を統一するという矛盾した運動の過程を構成した。

1978年の中国共産党第十一期三中全会で示した改革開放は、死線上で必死にこらえた農民が、生きるという最低の望みから出発し、下から上へ、暗を明に変え、上から下への思想解放運動を推し進め、さらにはすべての経済体制の改革を進めた。経済体制の改革および対外開放の進行と拡大は、政治体制改革の日程をも早めた。1986年6月10日鄧小平は経済情報報告を聞きながら次のように指示した。「1980年に政治体制改革を打ち出したが、具体化していない。今こそその日程が報告されなければならない。」「政治体制改革をおこなわなければ形勢に対応できない。」「経済体制改革のみで、政治体制改革をおこなわなければ、経済体制改革もたちゆかなくなる。なぜなら、まず人の障害が立ちほだかるからである。」そして、1986年7月1日中国共産党建党60周年記念日に、鄧小平が6年前に発表した『党和国家領導制度的改革』を新たに発表した。政界、学界は即座に活発化した。政治改革の歩みを加速するために、思想上と組織上の準備をおこない、同年9月に趙紫陽総理を長とする中央政治体制改革検討小組が組織され、その下には「政治改革事務室」が設けられた。そして、次の七つの改革内容が打ち出された。すなわち、党政分離、党組織と党

内民主の重視、更なる権力の下放、政府機構の簡素化、人事制度改革、社会主義的民主の強化、健全な法制である。この政治改革は1986年末の学生運動および胡耀邦総書記の失脚事件で一定のダメージを蒙ったが、鄧小平は翌年の十三大〔訳注：第13回中国共産党代表大会〕開催前に丁寧に次のように指摘した。「十三大は事実上改革・開放の大会と呼ぶべきであり、改革の歩みを加速し、さらに改革を進めなければならない。政治体制改革の問題は数年前にすでに示されているが、かつては重点を経済体制改革に置いており、今回ようやく政治体制改革を議事日程に挙げることができた。」

中共十三大は政治体制改革の緊迫性と長期性を強調し、その長期的目標は高度民主、法制の完備、高効率、活力に満ちた政治体制の構築に置かれた。当時の具体的な方法としては、趙紫陽総理が「二手から始める」方法を主張した。すなわち「一方は党内から始め、中央から始め、中央は手続き、制度、規則を作り上げることから始める。」「もう一方は、社会から始め、基層から始める。基層の民主を保障し、公民の民主的権利を保障し、政治について協議し対話することを広くおこなう。」

中共十三大以後、趙紫陽は積極的に政治体制改革の推進に努めたが、左右両方からの抵抗と妨害を受け、ついには1989年春の政治騒動と「左」の旧勢力の反発を引き起こし、経済発展速度の急降下と政治体制改革の後退に至ってしまった。

1992年春、鄧小平の南巡において一連の講話が発表され、中共の歴史ではしばしば「左」右の災いを蒙り、その最たるものは「左」であった、と総括した。翌年、朱鎔基が國務院のトップとなり、2003年の任期満了まで務め功を為して引退した。その間、中国の経済は内部体制の弊害と金融危機という困難や障害を克服する中で急激に推し進められ、世紀の境目で世界経済と同期することに成功し、WTOに加盟した。

四半世紀の改革と発展により、現在中国社会経済の総体的発展レベルは、すでに低所得の貧困状態から世界中レベルの衣食が満ちたり、まずまず裕福な状態にまでに達している。しかし、政治体制改革の進展は逆に緩慢である。特に江沢民が中共総書記であった時期、「安定が何よりも重要」という風潮を利用し、力を尽くし個人の「核心」作用を強化することで、「第三代指導者」の地位を樹立した。鄧小平死去後は、さらに政治ショーに我を忘れ、ショーが見せたものはまさに毛沢東晩年の失策そのものであった。

しかし、市場経済とIT技術の急激な発展にともない、対外開放は拡大し、国民の私生活の自由と民間の言論の自由はかなりの発展を見せ、少しずつ新たな啓蒙的思潮が作り出され、政治体制改革が再度長い道のりを歩むことが求められている。

社会構造の文化と再編、および利益構造の変動によって新たに活発化した思想論議に、多元化した時代の特徴が現れ出した。このことは我々が今回のシンポジウムの「思想文化セッション」で注目している内容でもある。

十数年にわたるショック、再考、下準備を経て、第16回中国共産党代表大会の指導者交代の後、新任の総書記胡錦濤は「公のために党は立ち、民のために執政する」ことを目標にし、2003年9月29日におこなわれた中共政治局第8回合同学習時に、歴史を総括し、新

たに政治体制改革を継続して推進することを打ち出した。彼は次のように強調した。すなわち、全面的に中流社会を建設する戦略から出発しなければならず、社会主義政治文明建設の重要性を十分に認識し、社会主義政治文明建設の規律を深く把握し、積極かつ確実に政治体制改革推進を継続する。社会主義的民主を拡大し、社会主義的法制を整え、法によって国を治め、社会主義法制国家を建設する。社会主義民主政治の制度化、規範化と秩序化を実現し、民主の団結と、生き生きとして活発な、そして安定かつ調和のとれた政治を強固なものとし、発展させる。

これは切実かつ民意に沿ったものである。もちろん、中国の政治改革の道のりは長く、そして困難である。重要なことは困難を恐れない指導者がいることであり、経験を教訓とすることに優れ、実践する中で成功の道を切り開くことである。

中共十六大の後、海外のいくつかの評論では、胡錦濤は「江規胡随」（江の規律を胡は従うのみ）と考えている。それは中国の政治文化を理解せず、外側から見るのみで、内側を理解しないわべだけの見方である。その種の断言は「四半世紀近くを経た生命の後、中国の改革は死亡しているようである」という浅はかな考えであることは言うまでもない。

（原文は中国語。邦訳 和田英穂）